

てんやわんや

文・写真 増穂登り窯 太田治孝



ゲエル公園から臨む
『サグラダ・ファミリア』。

最終回 アントニ・タピエス

スペイン・バルセロナ市に一步入ると、未完の大作『サグラダ・ファミリア』や『ゲエル公園』『カサ・ミラ』など、スペインが誇る天才建築家アントニオ・ガウディ（1852年〜1926年）の作品群に圧倒されます。このガウディと同じカタルーニャ地方に生まれ育ったのが、20世紀の現代美術の巨匠の一人といわれているアントニ・タピエス（1923年〜2012年）です。

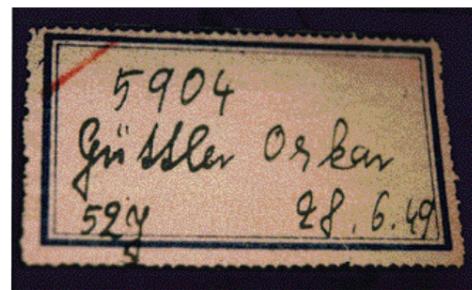
近年、カタルーニャ地方は民族の独立運動が報道されていますが、この独特の言語と伝統を持つカタルーニャ出身の作家としてピカソやダリ、ミロも有名です。1970年代に入り、美術評論家の岡田隆彦、東野芳明、詩人の瀧口修造らにより、カタ

ルーニャの風土の賛歌として、タピエスは日本に紹介されました。タピエスは画家としてスタートしますが、1950年代以降は、ミックス・メディアでの創作を開始、「壁の画家」と呼ばれ、キャンパスに厚く盛り上げた土や布、新聞紙、糸、針金などでコラージュした作品を創作、これは芸術への最大の貢献と評価されました。そのタピエスが、ある文章の中で「日本人は、私の作品の理解者である」と書いてあり、この言葉が40年間、私の脳裡を駆け巡って



タピエスの作品前にて。盛り土をコラージュしている。

ました。陶芸の原点は土を焼くことですが、どんな焼き方にするか、何度で焼くか、方法はいろいろとありますが、「大地」という物質の豊かな生命感の表情の表現であることに違いはありません。私はなんとかタピエスの作品をコレクションしたいと考えていましたが、なかなか気に入った作品に出会うことができずにおりました。ところが、十数年前に国内オークションでようやく出会えました。タピエスの作品を手に入れました。作品は、リトグラフに鉛筆描きの黒い紙がコラージュされています。作品のサイズは縦1m、横75cm。刷り部数は25枚限定で、うち



クレジット「5904 güssler os han 52y28.6.49」



オークションで購入したタピエスの作品。タイトルは不明。

のまま薪窯の中に入れて焼成すると、ますます表情が強調され、日本人好みになるのではないかと思います。陶板として焼成すれば、タイル絵としても飾れるでしょう。

アントニ・タピエス美術館に展示されている100号の作品に

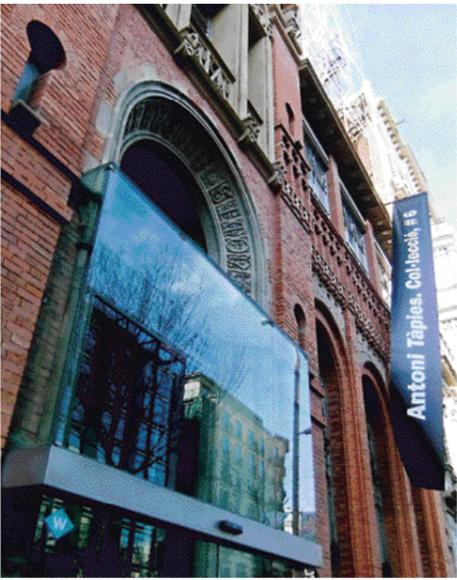


ミュージアムショップにて。

「椅子に腰を下ろす。夢の中のよう……。椅子は無限空間の白一色の中に浮かんでいる。そして、急に下を眺める。そこに、小さなものが撒き散らされている。ほんのつまらぬもの。脆い残骸がいくつかが、藁屑同然のものが……」私たちの日本の友達に、心をこめて。アントニ・タピエス 1976年6月4日バルセロナ。 私たち日本人は、タピエスにどんな回答をしたら良いのでしょうか。



美術館内。



バルセロナ市にあるアントニ・タピエス美術館前。

本作品は11番目です。コラージュの黒い紙には、「49・6・28」と記入されているので、これが制作年とすれば、1949年6月28日となります。タピエスは1923年生まれですので、26歳の時の作品になります。1950年に初めての個展をバルセロナで開催しているのですが、この作品が出品されたかもしれません。残念ながらその資料はここにはありません。 2012年秋、バルセロナ市内にアントニ・タピエス美術館がオープンしました。バルセロナに旅行される方がいらしたら、ぜひお立ち寄りください。 日本人はタピエスの理解者なので、ミックス・メディアで創作された「壁」の作品は、それを取って見ても可能であれば、そ